

## 校異源氏物語・はし姫

そのころ世にかすまへられ給はぬふる宮おはしけりは、かたなともやんことな  
くものしたまひてすちことなるへきおほえなとおはしけるをときうつりて世中  
にはしたなめられ給けるまきれに中／＼いとなこりなく御うしろみなどももの  
うらめしき心／＼にてかた／＼につけて世をそむきさりつ、おほやけわたくし  
により所なくさはなたれ給へるやうなりきたのかたもむかしの大臣の御むす  
めなりけるあはれにこゝろほそくおやたちのおほしをきてたりしさまなどおも  
ひいて給ふにたとしへなき事おほかれとふるき御契のふたつなきはかりをうき  
世のなくさめにてかたみに又なくたのみかはし給へりとしこるふるに御こもの  
し給はて心もとなかりければさう／＼しくつれ／＼なるなくさめにいかておか  
しからむちこもかなと宮そとき／＼おほしのたまひけるにめつらしく女君のい  
とうつくしけなるむまれ給へりこれをかきりなくあはれとおもひかしつき、こ  
え給にさしつゝきけしきはみ給ひてこのたひはおとこにてもなどおほしたる  
におなしさまにてたひらかにはしたまひなからいといたくわつらひてうせ給ぬ  
宮あさましうおほしまとふありふるにつけてもいとはしたなくたへかたき事お  
ほかる世なれとみすてかたくあはれなる人の御ありさま心さまにかけとゝめら  
るゝほたしにてこそすくしきつれひとりとりとまりていとゝすさましくもあるへき  
かないはけなき人／＼をもひとりはくゝみたてむほとかきりある身にいてとお  
こかましう人わろかるへきことゝおほしたちてほひもとけまほしうしたまひけ  
れとみゆつるかたなくてのこしとゝめむをいみしうおほしたゆたひつゝとし月  
もふれはをの／＼およすけまさり給ふさまかたちのうつくしうあらまほしきを  
明くれの御なくさめにてをのつからみすくし給後にむまれ給し君をはさふらふ  
人／＼もいてやおりふし心うくなどうちつふやきて心にいれてもあつかひきこ  
えさりけれとかきりのさまにてなに事もおほしわかさりしほとなからこれとい  
と心くるしとおもひてたゝこの君をかたみにみ給ひてあはれとおほせとはか  
りたゝひとことなむ宮にきこえをきたまひければさきの世の契もつらきおりふ  
しなれとさるへきにこそはありけめといまはとみえしまていとあはれと思ひて  
うしろめたけにのたまひしをとおほしいてつゝこの君をしもいとかなしうした

てまつりたまふかたちなむまことにいつくしうゆゝしきまでものし給ける  
ひめ君は心はせしつかによしあるかたにてみるめてなしもけたかく心にくき  
さまそし給へるいたはしくやむことなきすちはまさりていつれをもさまゝに  
おもひかしつききこえ給へとかなはぬ事おほくとし月にそへて宮のうちさひし  
くのみなりまさるさふらひし人もたつきなき心ちするにえしのひあへすつき  
ゝにしたかひてまかてちりつゝわか君の御めのともさるさはきにはかゝ  
しき人をしもえりあへ給はさりければほとにつけたる心あさゝにてをさなき  
ほとをみすてたてまつりにければたゝ宮そはくゝみ給ふさすかにひろくおも  
しろき宮のいけ山などのけしきはかりむかしにかはらていいたうあれまさ  
るをつれゝとなかめ給ふけいしなともむねむねしき人もなきまゝに草あを  
やかにしけり軒のしのふそ所えかほにあをみわたれるおりゝにつけたる花  
もみちの色をもかをもおなし心にみはやし給ひしにこそなくさむこともおほ  
かりけいとゝしくさひしくよりつかむかたなゝきまゝにち仏の御かさりはか  
りをわさとせさせ給てあけくれおこなひ給かゝるほたしともにかゝつらふた  
におもひのほかにくちおしうわか心なからもかなはさりける契とおほゆるを  
まひてなにか世の人めいていまさらにとのみとし月にそへて世中をおほしは  
なれつゝ心はかりはひしりになりはてたまひてこ君のうせたまひにしこなた  
はれの人のさまなる心はえなとたはふれにてもおほしいて給はさりけりな  
とかさしもわかるるほとのかなしひはまた世にたくひなきやうにのみこそは  
おほゆへかめれとありふれはさのみやは猶世人になすらふ御心つかひをし給  
ひていとかくみくるしくたつきなき宮のうちものをのつからもてなさるゝわさも  
やと人はもとききこえてなにくれとつきゝしくきこえこつこともるひにふれ  
ておほかれときこしめしいれさりけり御念すのひまゝにはこの君たちをもて  
あそひやうゝおよすけ給へはことならはし五うちへんつきなどはかなき御あ  
そひわさにつけても心はへともをみたてまつり給ふにひめ君はらうゝしくふ  
かくおもりにみえたまふわか君はおほとかにらうたけなるさましてもつゝ  
みしたるけはひにいつくしうさまゝにおはす春のうらゝかなる日かけに  
池の水とりものはねうちかはしつゝをのかしゝさへつるこゑなどをつねはは  
かなきことにみたまひしかともつかひはなれぬをうらやましくなかめ給ひて君  
たちに御ことゝもをしへきこえたまふいとおかしけにちひさき御ほとにとり  
りかきならし給ふものゝねともあはれにおかしきこゆれは涙をうけたまひ  
て

うちすてゝつかひさりにし水とりのかりのこの世にたちおくれけん心つく

しなりやとめをしのこひ給かたちいときよけにおはします宮なりとし比の御おこなひにやせほそり給にたれとさてしもあてになまめきて君たちをかしつき給ふ御心はえになをしのなえはめるをき給ひてしとけなき御さまいとはつかしけ也ひめ君御すゝりをやをらひきよせてゝならひのやうにかきませ給ふをこれにかき給へすゝりにはかきつけさなりとてかみたてまつり給へははちらひてかきたまふ

いかてかくすたちけるそと思ふにもうき水とりの契をそしるよからねとそ

のおりはいとあはれなりけりてはおいさきみえてまたよくもつゝけ給はぬほと也わか君とかきたまへとあれはいますこしおさなけにひさしくかきいて給へりなくくもはねうちきする君なくは我そすもりになりははてまし御そとも

なとなえはみておまへにまた人もなくいときひしくつれくけなるにさまくいとらうたけにてもものしたまふをあはれに心くるしういかおほさゝらん経をかたてにもたまいてかつよみつゝさうかをし給ひめ君にひわわか君にさうの御ことまたおさなけとつねにあはせつゝならひ給へはきゝにくゝもあらていとおかしくきこゆちゝみかにも女御にもとくをくれきこえ給ひてはかはかしき御うしろみのとりたてたるおはせさりければさゑなとふかくもえならひたまはすまいて世中にすみつく御心をきてはいかてかはしりたまはむたかき人ときこゆるなかにもあさましうあてにおほとかなる女のやうにおはすればふるき世の御たから物おほちおとゝの御そうふんなにやかやとつきすましかりけれとゆくゑもなくはかなくうせはてゝ御てうとなとはかりなんわさとうるはしくておほかりけるまいりとふらひきこえ心よせたてまつる人もなしつれくなるまゝにうたつかさのものゝしとものとやうのすくれたるをめしよせつゝはかなきあそひに心をいれておいゝて給へればそのかたはいとおかしうすくれたまへり源氏のおとゝの御おとうとおはせしをれせい院の東宮におはしましゝときすさく院のおほきさきのよこさまにおほしかまへてこの宮を世中にたちつき給ふへくわか御ときもてかしつきたてまつりけるさはきにあひなくあなたさまの御ならひにはさしはなたれ給ひにければいよくかの御つきくになりはてぬる世にてえましらひ給はすまたこのところかゝるひしりになりはてゝいまはかきりとよろつをおほしすてたりかゝるほとにすみ給ふ宮やけにけりいとゝしきよにあさましうあえなくてうつろひすみ給ふへき所のよろしきもなかりければうちといふところによしある山さともたまへりけるにわたり給ふおもひすてたま

へるよなれともいまはとすみはなれなんをあはれにおほさるあしろのけはひち  
かくみゝかしかましき川のわたりにてしつかなる思ひにかなはぬかたもあれと  
いかゝはせむ花もみち水のなかれにも心をやるたよりによせていとゝしくなか  
め給よりほかのことなしかくたえこもりぬる野山のすゑにもむかしの人ものし  
給はましかはとおもひきこえたまはぬおりなかりけり

みし人も宿もけふりになりにしをなにとて我身きえのこりけんいけるかひ

なくそおほしこかるゝやいとゝ山かさなれる御すみかにたつねまいる人なしあ  
やしき下すなどあなかひたる山かつとものみまれになれまいりつかうまつるみ  
ねのあさきりはるゝおりなくてあかしくらしたまふにこのうち山にひしりたち  
たるあさりすみけりさへいとかしこくてよのおほえもかるからねとおさゝお  
ほやけことにもいてつかへすこもりゐたるにこの宮のかくちかきほとにすみ給  
てさひしき御さまにたうときわさをせさせ給つゝ法もんをよみならひたまへは  
たうとかりきこえてつねにまいるとしころまなひしり給へる事とものふかき心  
をとときかせたてまつりいよいよこの世のいとかりそめにあちきなきことを申  
しらすれば心はかりはゝちすのうへに思ひのほりにこりなき池にもすみぬへき  
をいとかくおさなき人ゝをみすてむうしろめたさはかりになむえひたまちに  
かたちをもかへぬなとへたてなく物かたりし給このあさりはれせい院にもした  
しくさふらひて御経などをしへきこゆる人なりけり京にいてたるつゐてにまい  
りてれいのさるへきふみなと御らむしてとはせ給ふこともあるつゐてに八の宮  
のいとかしこくないけうの御さえさとりふかくものし給けるかなさるへきにて  
むまれたまへる人にやものし給らむ心ふかく思ひすまし給へるほとまことのひ  
しりのをきてになむみえ給ときこゆいまたかたちかはかへたまはすやそくひしり  
とかこのわかき人ゝのつけたなるあはれなること也などのたまはすさい相中  
将も御前にさふらひ給てわれこそ世中をはいとすさましう思ひしりなからおこ  
なひなと人にめとゝめらるはかりはつとめすくちおしくてすくしくれと人しれ  
すおもひつゝそくなからひしりになり給ふ心のをきてやいかにとみゝとゝめて  
きゝたまふ出家の心さしはもとよりもものし給へるをはかなきことにおもひとゝ  
こほりいまとなりては心くるしき女子ともの御うへをえおもひすてぬとなんな  
けき侍りたまふとそうすさすかにものゝねめつるあさりにてけにはたこのひめ  
君たちのことひきあはせてあそひ給へる河なみにきをひてきこえ侍はいとおも  
しろくこくらく思ひやられ侍やとこたいにめつれはみかとほゝゑみ給ひてさる  
ひしりのあたりにおひいてゝこのよのかたさまはたとゝしからむとおしはか

らるゝをおかしのことやうしろめたくおもひすてかたくもてわつらひ給らんを  
もししはしもをくれむとはゆつりやはしたまはぬなどそのたまはするこの院  
のみかとは十のみこにそおはしましけるすさく院のこ六条院にあつきこえ給  
し入道の宮の御ためしをおもほしいてゝかの君たちをかなつれゝなるあそひ  
かたきになとうちおほしけり中将君中ゝみこのおもひすましたまへらむ御心  
はえをたいめむしてみたてまつらはやとおもふ心そふくなりぬるさてあさり  
のかへりいるにもかならずまいりて物ならひきこゆへくまつうちゝにもけし  
き給はりたまへなとかたらひたまふみかとの御ことつてにてあはれる御すま  
ゐを人つてにきくことなときこえたまうて

世をいとふ心は山にかよへともやへたつ雲を君やへたつるあさりこの御つ

かひをさきにたてゝかの宮にまいりぬなのめなるきはのさるへき人のつかひた  
にまれなる山かけにいとめつらしくまちよろこひ給て所につけたるさかななど  
してさるかたにもてはやし給御返し

あとたえて心すむとはなけれども世をうち山にやとをこそかれひしりのか

たをはひけしてきこえなし給へれば猶よにうらみのこりけるといとおしく御ら  
むすあさり中将のたうしむふかけにものし給ふなとかたりきこえて法文などの  
心えまほしき心さしなんいはけなかりしよはひよりふかくおもひなからえさら  
すよにありふるほとおほやけわたくしにいとまなくあけくらしわさとゝちこも  
りてならひよみおほかたはかゝしくもあらぬ身にしも世中をそむきかほなら  
むもはゝかるへきにあらねとをのつからうちたゆみてまきはしくてなむすく  
しくるをいとありかたき御ありさまをうけたまはりつたへしよりかく心にか  
けてなんたのみきこえさするなとねむころに申給ひしなとかたりきこゆ宮よのな  
かをかりそめのことゝおもひとりいとはしき心のつきそむる事もわかみにうれ  
へあるときなへての世もうらめしう思ひしるはしめありてなん道心もおこるわ  
さなめるをとしわかく世中おもふにかなひなにこともあかぬことはあらしとお  
ほゆる身のほとにさはた後の世をさへたとりしり給らんかありかたさこゝには  
さへきにやたゝいとひはなれよとことさらに仏などのすゝめおもむけたまふや  
うなるありさまにてをのつからこそしつかなる思ひかなひゆけとのこりすくな  
き心ちするにはかゝしくもあらてすきぬへかめるをきしかたゆくすゑさらに  
えたる所なくおもひしるゝをかへりては心はつかしけなる法のともにこそは  
ものし給なれなどのたまひてかたみに御せうそこかよひみつからもまうて給ふ  
けにきゝしよりもあはれにすまひたまへるさまよりはしめていとかりなる草の

いほりにおもひなしことそきたりおなしき山さと、いへとさるかたにて心とまりぬへくのとやかなるもあるをいとあらましき水のとなみのひ、きにもわすれうちしよるなと心とけて夢をたにみるへきほともなけにすくふきはらひたりひしりたちたる御ためにかゝるしもこそ心とまらぬもよほしならめ女君たちな心にちしてすくし給らむよのつねの女しくなよひたるかたはとをくやおしはかるゝ御ありさまなり仏の御へたてにさうしはかりをへたてゝそおはすへかめるすき心あらむ人はけしきはみよりて人の御心はえをもみまほしうさすかにいかゝとゆかしうもある御けはひなりされとさるかたをおもひはなるねかひに山ふかくたつねきこえたるほひなくすきゝしきなをさりことをうちいてあされはまむもことにたかひてやなとおもひかへして宮の御ありさまのいとあはれなるをねむころにとふらひきこえたまひたひゝまいり給ひつゝおもひしやうにうはそくなからおこなふ山のふかき心法もなんとわさとさかしけにはあらていとよくのたまひしらすひしりたつ人さえあるほうしなどはよにおほかれとあまりこはゝしうけとをけなるしうとくのそうつそう正のきは、世にとまなくきすくにてもゝ心をとひあらはさむもことゝしくおほえたまふまたその人ならぬ仏の御てしのいむことをたもつばかりのたうときはあれとけはひいやしくこと葉たみてこちなけにものなれたるいものしくてひるはおほやけことにいとまなくなとしつゝしめやかなるよひのほとけちかき御まぐらかみなとにめしいれかたらひ給ふにもいとさすかに物むつかしうなどのみあるをいとあてにこゝろくるしきさましてのたまひいつることの葉もおなし仏の御をしへをもみゝちかきたとひにひきませいとこよなくふかき御さとりにはあらねとよき人はものゝ心をえたまふかたのいことにもものしたまひければやうゝみなれたてまつり給たひことにつねにみたてまつらまほしうていとまなくなとして程ふるときは恋しくおほえ給この君のかくたうとかりきこえたまへればれせい院よりもつねに御せうそなとありてとしころをとにもおさゝきこえ給はすさひしけなりし御すみかやうゝ人めみるときゝありおりふしにとふらいきこえ給こといかめしうこの君もまつさるへき事につけつゝおかしきやうにもまめやかなるさまにも心よせつかうまつり給こと三年はかりになりぬ秋のすゑつかた四きにあてゝし給御念仏をこの河つらはあしろのなみもこのころはいとゝみゝかしこましくしつかならぬをとてかのあさりのすむ寺のたうにうつろひたまひて七日のほとおこなひ給ふひめ君たちはいと心ほそくつれゝまさりてなかめ給けるころ中將の君ひさしくまいらぬかなと思ひいてきこえ給けるまゝ

にあり明の月のまた夜ふかくさしいつるほどにいてたちていとしのひて御ともに人などもなくてやつれておはしけり川のこなたなれは舟などもわつらはて御馬にてなりけりいりもてゆくまゝに霧ふたかりて道もみえぬしけきの中をわけ給ふにいとあらましき風のきほひにほろゝとおちみたるゝ木葉の露のちりかゝるもいとひやゝかに人やりならすいたくぬれ給ひぬかゝるありきなどもおさくならひたまはぬ心ちに心ほそくおかしくおほされけり

山おろしにたえぬこの葉の露よりもあやなくもろき我涙かな山かつのおと

ろくもうるさしとてすいしんのをともせさせ給はすしはのまかきをわけつゝそこはかとなき水のなかれともをふみしたくこまのあしをとも猶しのひてとようひし給へるにかくれなき御にほひそ風にしかひてぬしゝらぬかとおとろくねさめの家ゝありけるちかくなるほどにそのことゝもきゝわかれぬものゝねともいとすこけにきこゆつねにかくあそひたまふときくをついてなくてみやの御ことのねのなたかきもえきかぬそかしよきおりなるへしとおもひつゝいり給へはひわのこゑのひゝきなりけりわうしきてうにしらへてよのつねのかきあはせなれと所からにやみゝなれぬ心ちしてかきかへすはちのおとも物きよけにおもしろしさうのことあはれになまめひたるこゑしてたえくきこゆしはしきかまほしきにしのひ給へと御けはひしるくきゝつけてとのひ人めくおのこなまかたくなしきいてきたりしかくゝなんこもりおはします御せうそこをこそきこえさせめと申すなにかしかゝきりある御おこなひの程をまきはしきこえさせむにあひなしかくぬれぬれまいりていたつらにかへらむうれへをひめ君の御かたにきこえてあはれとの給はせはなむなくさむへきとのたまへはみにくきかほうちゑみて申させ侍らむとてたつをしはしやとめしよせてとしころ人つてにのみきゝてゆかしくおもふ御ことのねともをうれしきおりかなしはしすこしたちかくれてきくへきものゝくまありやつきなくさしすきてまいりよらむほとみなことやめ給ひてはいとほひなからんとの給御けはひかほかたちのさるなをなをしき心ちにもいとめてたくかたしけなくおほゆれは人きかぬときはあけくれかくなんあそはせとしも人にも宮このかたよりまいりたちまする人侍るときはをともせさせ給はすおほかたかくて女たちおはしますことをはかくさせ給ひなへての人にしらせたてまつらしとおほしのたまはするなりと申せはうちわらひてあきなき御ものかくしななりしかしのひ給ふなれとみな人ありかたき世のためしにきゝいつへかめるをとの給てなをしるへせよわれはすきくしき心となき人そかくておはしますすらむ御ありさまのあやしくけになへてにおほえ給はぬな

りとこまやかにのたまへはあなかしこ心なきやうに後のきこえや侍らむとてあなたの御まへはたけのすいかひしこめてみなへたてことなるを、しへよせてまつれり御どもの人はにしのらうによひすへてこのとのゐ人あひしらふあなたにかよふへかめるすひかひのとをすこしをしあけてみ給へは月おかしきほとに霧わたれるをなかつてすたれをみしかくまきあけて人くゝゐたりすのこにいとさむけに身ほそくなえはめるわらはひとりおなしさまなるおとな、とゐたりうちなる人一人はしらにすこしゐかくれてひはをまへにをきてはちをてまさくりにしつゝゐたるに雲かくれたりつる月にはかにいとあかくさしいてたれはあふきならてこれしても月はまねきつへかりけりとてさしのそきたるかほいみしくらうたけに、ほいやかなるへしそひふしたる人はことのうへにかたふきかりている日をかへすはちこそありけれさまことにもおもひをよひ給ふ御心かなとてうちわらひたるけはひいますこしおもりかによしつきたりをよはすともこれも月にはなる、物かはなとはかなきことをうちとけの給かはしたるけはひともしらによそに思ひやりしにはにすいとあはれになつかしうおかしむかし物かたりなどにかたりつたへてわかき女房などのよむをもきくにならずかやうの事をいひたるさしもあらさりけむとにくゝおしはからるゝをけにあはれなる物のくまありぬへき世なりけりと心うつりぬへしきりのふかければさやかにみゆへくもあらず又月さしいてなんとおほすほどにおくのかたより人おはすとつけきこゆる人やあらむすたれおろしてみないりぬおとろきかほにはあらずなこやかにもてなしてやをらくくれぬるけはひともしきぬのをともせずいとなよらかに心くるしくていみしうあてにみやひかなるをあはれとおもひ給ふやをらいてて京に御車ゐてまいるへく人はしらせつありつるさふらひにおりあしくまいり侍にけれと中くうれしくおもふことすこしなくさめてなむかくさふらふよしきこえよいたうぬれにたるかこともきこえさせむかしとのたまへはまいりてきこゆかくみえやしぬらんとはおほしもよらてうちとけたりつる事どもをき、やしたまひつらむといとみしくはつかしあやしくかうはしくにほふ風の吹つるをおもひかけぬほとなれはおとろかさりける心をそさよと心もまとひてはちをはさうす御せうそなとつたふる人もいとうゝしき人なめるをおりからにこそよろつのこととおほひてまた霧のまきれなれはありつるみすのまへにあゆみいて、つゐい給ふ山さとひたるわか人ともはさしいらへむことはもおほえて御しとねさしいつるさまもとくしけなりこのみすのまへには、したなく侍りけりうちつけにあさき心はかりにてはかくもたつねまいるましき山のかけ



ちにおもふ給ふるをさまことにこそかく露けきたひをかさねてはさりとて御らむししるらむとなんたのもしう侍といとまめやかにの給わかき人／＼のなたらかにものきこゆへきもなくきえかへりか、やかしけなるもかたはらいなければ女はらのおくふかきをおこしいつるほどひさしくなりてわざとめひたるもくるしうてなにこともおもひしらぬありさまにてしりかほにもいか、はきこゆへくといとよしありあてなるこゑしてひきいりなからほのかにのたまふかつしりなからうきをしらすかほなるもよのさかとおもふたまへしるをひと、ころしもあまりおほめかせ給らんこそくちおしかるへけれありかたうよろつをおもひすましたる御すまゐなとにたくひきこえさせ給御心のうちはなにこともす、しくをしはかられ侍れは猶かくしのひあまり侍ふかさあさ、のほともわけ給はんこそかひは侍らめよのつねのすき／＼しきすちにはおほしめしはなつへくやさやうのかたはわざとす、むる人侍りともなひくへうもあらぬ心つよさになんをのつからきこしめしあはするやうも侍りなんつれ／＼とのみすくし侍よの物かたりもきこえさせ所にたのみきこえさせ又かく世はなれてなかめさせ給らん御心のまきらはしにはさしもおとろかさせたまふばかりきこえなれ侍らはいかに思ふさまに侍らむなとおほくの給へはつ、ましくいらへにく、ておこしつるおひ人のいてきたるにそゆつりたまふたとしへなくさしすくしてあなかたしけなやかたはらいたきおましのさまにも侍かなみすのうちにこそわかき人／＼はものゝほとしらぬやうに侍こそなとした、か、にいふこゑのさたすきたるもかたはらいたく君たちはおほすいともあやしく世中にすまゐ給人のかすにもあらぬ御ありさまにてさもありぬへき人／＼たにとふらひかすまへきこえ給もみえきこえすのみなりまさり侍めるにありかたき御心さしのほとはかすにも侍らぬ心にもあさましきまておもひたまへ侍をわかき御心ちにもおほしりなからきこえさせたまひにくきにや侍らむといとつ、みなくものなれたるもなまにくきものからけはひいたう人めきてよしあるこゑなれはいとたつきもしらぬ心ちしつるにうれしき御けはひにこそなにこともけにおもひしり給けるたのみこよなかりけりとてより給へるをき丁のそはよりみれはあけほのやう／＼もの、色わかるゝにけにやつしたまへるとみゆるかりきぬすかたのいとぬれしめりたるほどうたてこの世のほかのにほひにやとあやしきまてかほりみちたりこのおひ人はうちなきぬさしすきたるつみもやとおもふたまへしのふれとあはれなるむかしの御物かたりのいかならむついてにうちいてきこえさせかたはしをもほのめかししろしめさせむと、しころねんすのついてもうちませおもふ給へわたるし

るしにやうれしきおりに侍をまたきにおほゝれ侍涙にくれてえこそきこえさせ  
す侍けれどもちわなゝくけしきまことにいみしくものかなしと思へりおほかた  
さたすきたる人は涙もろなる物とはみきゝ給へといとかうしもおもへるもあや  
しうなり給てこゝにかくまいることとはたひかさなりぬるをかくあはれしりたま  
へる人もなくてこそ露けきみちのほとにひとりのみそほちつれうれしきつゐて  
なめるをことなのこひたまひそかしとのたまへはかゝるつゐても侍らしかし  
又侍りとも夜のまのほとしらぬ命のたのむへきにも侍らぬをさらはたゝかゝる  
ふるもの世に侍けりとはかりしろしめされ侍らなむ三条の宮に侍しこしゝうは  
かなくなり侍にけるとほのきゝ侍しそのかみむつましうおもふ給へしおなし程  
の人おほくうせ侍にける世のすゑにはるかなるせかいよりつたはりまうてきて  
このいつとせむとせのほとなむこれにかくさふらひ侍しろしめさしかしこのこ  
ろとう大納言と申なる御このかみの右衛門のかみにてかくれ給にしはものゝつ  
ゐてなどにやかの御うへとてきこしめしつたふる事も侍らむすぎ給ていくはく  
もへたゝらぬ心ちのみし侍そのおりのかなしさもまた袖のかはくおり侍らすお  
もふたまへらるゝをかくおとなしくならせ給にける御よはひのほとも夢のやう  
になんかの権大納言の御めのとに侍しは弁かはゝになむ侍しあさ夕につかうま  
つりなれ侍しに人かすにも侍らぬみなれと人にしらせす御心よりはたあまりけ  
ることをおりくゝうちかすめのたまいしをいまはかきりになり給にし御やまひ  
のすゑつかたにめしよせていさゝかの給をくことなむ侍しをきこしめすへきゆ  
へなんひとこと侍れとかはかりきこえて侍にのこりをとおほしめす御心侍ら  
はのとかになんきこしめしはて侍へきわかき人ゝもかたはらいたくさしすぎ  
たりとつきしろひ侍もことほりになむとてさすかにうちいてすなりぬあやしく  
夢かたりかむなきやうのものゝとはすかたりすらむやうにめつらかにおほさる  
れとあはれにおほつかなくおほしわたることのすちをきこゆれはいとおくゆか  
しけれとけに人めもしけしさしくみにふる物かたりにかゝつらひて夜をあかし  
はてむもちこゝしかるへければそこはかとおもひわくことはなきものからい  
にしへの事ときゝ侍も物あはれになんさらはかならすこのゝこりきかせ給へ霧  
はれゆかははしたなかるへきやつれをおもなく御らんしとかめられぬへきさま  
なれはおもふたまふる心のほとよりはくちおしうなむとてたちたまふにかのお  
はしますてらのかねのこゑかすかにきこえてきりいとふかくたちわたれりみね  
のやへ雲おもひやるへたておほくあはれなるになをこのひめ君たちの御心のう  
ちとも心くるしうなにごことをおほしのこすらむかくいとおくまりたまへるもこ

とはりそかしなとおほゆ

あさほらけ家路もみえすたつねこしまきのを山は霧こめてけり心ほそくも

侍かなとたちかへりやすらひ給へるさまを宮この人のめなれたるに猶いとこ  
とにおもひきこえたるをまいていかゝはめつらしうみきこえさらん御返きこえ  
つたへにくけにおもひたれはれいのいとつゝましけにて

雲のゐる嶺のかけちを秋きりのいとゝへたつるころにもあるかなすこしう

ちなけひたまへるけしきあさからすあはれなりなにはかりおかしきふしはみえ  
ぬあたりなれとけにこゝろくるしきことおほかるにもあかうなりゆけはさすか  
にひたおもてなる心ちして中／＼なるほとにうけたまはりさしつることおほか  
るのこりはいますこしおもなれてこそはうらみきこえさすへかめれさるはかく  
世の人めひてもてなし給へくは思はずに物おほしわかさりけりとうらめしうな  
んとてとのゐ人かしつらひたるにしおもてにおはしてなかも給ふあしろは人さ  
はかしけなりされとひをもよらぬにやあらむすさましけなるけしきなりと御と  
もの人／＼みしりていふあやしき舟ともにしはかりつみをの／＼なにとなき世  
のいとなみともにゆきかふさまものはかなき水のうへにうかひたるたれもお  
もへはおなしことなるよのつねなさなりわれはうかはすたまのうてなにしつけ  
き身とおもふへき世かはとおもひつゝけらるすゝりめしてあなたにきこえ給ふ  
橋ひめの心をくみてたかせさすさほのしづくに袖そぬれぬるなかも給ふら  
むかしとてとのひ人にもたせたまへりいとさむけにいらゝきたるかほしてもて  
まいる御かへりかみのかなとおほろけならむはゝつかしけなるをときをこそか  
ゝるおりにはとて

さしかへるうちの河おさあさ夕のしつくや袖をくたしはつらむ身さへうき

てといとおかしけにかき給へりまおにめやすくものし給けりと心とまりぬれ  
と御車あてまいりぬと人／＼さはかしきこゆれはとのゐ人はかりをめしよせて  
かへりわたらせたまはむほとにかならずまいるへしなどのたまふぬれたる御そ  
ともはみなこの人にぬきかけ給ひてとりにつかはしつる御なをしにたてまつり  
かへつおい人の物かたり心にかゝりておほしいてらるおもひしよりはこよなく  
まさりておかしかりつる御けはひともおも影にそひて猶おもひはなれかたき世  
なりけりと心よはく思しらる御ふみたてまつり給ふけさうたちでもあらずしろ  
きしきしのあつこえたるにふてひきつくろひえりてすみつきみどころありてか  
き給ふうちつけなるさまにやとあひなくとゝめ侍てのこりおほかるも心くるし  
きわさになむかたはしきこえをきつるやうにいまよりはみすのまへも心やすく

おほしゆるすへくなむ御山こもりはて侍らむ日かすもうけたまはりをきていふ  
せかりしきりのまよひもはるけ侍らむなとそいとすくよかにかき給へるさこん  
のさうなる人御つかひにてかのおい人たつねてふみもとらせよとのたまふとの  
ひ人かさむけにてさまよひしなとあはれにおほしやりておほきなるひはりこや  
うのものあまたせさせ給ふまたの日かの御てらにもたてまつり給ふ山こもりの  
そうともこの比のあらしにはいと心ほそくるしからむをさておはしますほと  
のふせ給ふへからんとおほしやりてきぬわたなどおほかりけり御おこなひはて  
ゝいてたまふあしたなりければをこなひ人ともにわたきぬけさ衣なとすへてひ  
とくたりのほとつつあるかきりの大とこたちに給ふとのゑ人か御ぬきすてのえ  
むにいみしきかりの御そともえならぬしろきあやの御そのなよゝといひしら  
すにほへるをうつしきて身をはたえかへぬものなれはにつかはしからぬ袖のか  
を人ことにとかめられめてらるゝなむ中ゝ所せかりける心にまかせて身をや  
すくもふるまはれすいとむくつけきまで人のおとろくにほひをうしなひてはや  
とおもへと所せき人の御うつりかにてえもすゝきすてぬそあまりなるや君はひ  
め君の御返こといとめやすくこめかしきをおかしくみ給ふ宮にもかく御せうそ  
こありきなと人ゝきこえさせ御らむせさすれはなにかはけさうたちでもてな  
ひ給はむも中ゝうたてあらむれいのわか人にゝぬみ心はえなめるをなからむ  
後もなどひとことうちほめかしてしかはさやうにて心そとめたらむなどの給  
けり御みつからもさまゝの御とふらひの山のいはやにあまりしことなどのた  
まへるにまうてんとおほして三の宮のかやうにおくまりたらむあたりのみまさ  
りせむこそおかしかるへけれとあらましことにたにのたまふ物をきこえはけま  
して御心さはかしたてまつらむとおほしてのとやかなる夕くれにまいり給へり  
れいのさまゝなる御物かたりきこえかはし給ふついてにうちの宮の御事かた  
りいてゝみしあか月のありさまなとくはしくきこえ給ふに宮いとせちにおかし  
とおほひたりされはよと御けしきをみていとゝ御心うこきぬへくいひつゝけた  
まふさてそのありけんかへりことはなとかみせ給はさりしまろならましかはと  
うらみ給ふさかしいとさまゝ御らむすへかめるはしをたにみせさせたまはぬ  
かのわたりはかくいともむもれたる身にひきこめてやむへきはひにも侍らぬ  
はかならず御らむせさはやとおもひ給れといかてかたつねよらせ給へきかや  
すきほとこそすかまほしくはいとよくすきぬへきよに侍りけれうちかくろへつ  
ゝおほかめるかなさるかたにみところありぬへき女のもの思はしきうちしのひ  
たるすみかとも山里めひたるくまなとにをのつから侍へかめりこのきこえさす

るわたりはいとよつかぬひしりさまにてこち／＼しうそあらむと、しころ思あ  
なつり侍てみ、をたにこそと、め侍らさりけれほのかなりし月影のみをとりせ  
すはまをならんはやけはひありさまはたさはかりならむをそあらまほしきほと  
ゝはおほえ侍へきなときこえたまふはて／＼はまめたちていとねたくおほろけ  
の人に心うつるましき人のかくふかくおもへるをおろかならしとゆかしうおほ  
すことかきりなくなり給ひぬなをまた／＼よくけしきみたまへと人をすすめ給  
てかきりある御身のほとよたけさをいとはしきまて心もとなしとおほしたれ  
はおかしくいてやよしなくそ侍しはし世中に心と、めしと思ふ給るやうある  
身にてなをさりこともつ、ましう侍を心なかなはぬ心つきそめなはおほき  
におもひにたかふへきことなむ侍へきときこえ給へはいてあなこと／＼しれひ  
のおとろおとしきひしりことはみはて、しかなとてわらひ給ふ心のうちには  
かのふる人のほめかししすちなどのいと、うちおとろかれて物あはれなるに  
おかしとみることもめやすしときくあたりもなにはかり心にもとまらさりけり  
十月になりて五六日のほどにうちへまうてたまふあしろをこそこの比は御らむ  
せめときこゆる人／＼あれとなにかそのひをむしにあらそふ心にてあしろにも  
よらむとそきすて給てれいのいとしのひやかにいてたち給かるらかにあしろ  
くるまにてかとりのをしさしぬきぬはせてことさらひき給へり宮まちよろこ  
ひ給て所につけたる御あるしなとおかしうしなしたまふくれぬれはおほとなふ  
らちかくてさき／＼みさしたまへるふみとものふかきなとあさりもさうしおろ  
してきなといはせ給ふうちもまとろます河かせのいとあらましきに木葉のちり  
かふをと水のひ、きなどあはれもすきて物おそろしく心ほそき所のさまなりあ  
けかたちかくなりぬらんと思ふほどにありしし、めおもひいてられて琴のね  
のあはれなることのついてつくりいて、さきのたひの霧にまとはされ侍し明ほ  
のにいとめつらしきもの、ねひとこゑうけたまはりしのこりなむ中／＼にいと  
いふかしうあかすおもふたまへらる、なときこえたまふ色をもかをもおもひす  
て、し後むかしき、しこともみなわすれてなむとのたまへと人めして琴とりよ  
せていと月なくなりたりやしるへするもの、ねにつけてなんおもひいてらる  
へかりけるとてひわめしてまらうとにそ、のかし給ふとりてしらへたまふさら  
にほのかにき、侍しおなしものとも思ふたまへられさりけり御ことのひ、きか  
らにやとこそおもふたまへしかとて心とけてもかきたてたまはすいてあなさか  
なやしき御みとまはかりのてなとはいつくよりかこ、まてはつたはりこむ  
あるましき御ことなりとてきむかきならしたまへるいとあはれに心すこしかた

へはみねのまつ風のもてはやすなるへしいたとくしけにおほめき給て心はえありてひとつはかりにてやめたまひつこのわたりにおほえなくておりくほのめくさうのこのねこそ心えたるにやときくおり侍れと心とめてなどもあらでひさしうなりにけりや心にまかせてをのくかきならすへかめるは川なみはかりやうちあはすらむるなうもの、ようにすはかりのはうしなともとまらしとなむおほえ侍とてかきならし給へとあなたにきこえたまへとおもひよらさりしひとりことをき、給ひけんたにある物をいとかたはならむとひきいりつ、みなき、給はすたひくそ、のかしたまへととかくきこえさひてやみ給ひぬめれはいとくちおしうおほゆそのついでにもかくあやしうよつかぬおもひやりにてすすありさまとものおもひのほかなる事などはつかしうおほひたり人にたにいかてしらせしとはく、みすくせとけふあすともしらぬ身の、こりすくなさにさすかにゆくすゑとをき人はおちあふれてさすらへん事これのみこそけによをはなれんきはほたしなりけれどもうちかたらひ給へは心くるしうみたてまつりたまふわさとの御うしろみたちはかはかしきすちには侍すともうとくしからすおほしめされんとなむおもふたまふるしはしもなからへ侍らむいのちの程はひとこともかくうちいてきこえさせてむさまをたかへ侍ましくなむなど申給へはいとうれしきこと、おほしの給さてあか月かたの宮の御おこなひしたまふほとにかのおい人めしいて、あひたまへりひめ君の御うしろみにてさふらはせ給ふ弁の君とそいひける年も六十にすこしたらぬほとなれとみやひかにゆへあるけはひして物なときこゆ古権大納言の君のよとともにものをおもひつ、やまひつきはかなくなりたまひにしありさまをきこえいて、なくことかきりなしけによその人のうへときかむたにあはれなるへきふること、もをましてとしころおほつかなくゆかしういかなりけんことのはしめにかと仏にもこの事をさたかにしらせ給へとねんしつるしにやかく夢のやうにあはれなるむかしかたりをおほえぬついでにき、つけつらむとおほすに涙と、めかたかりけりさてもかくそのよの心しりたる人もこりたまへりけるをめつらかにもはつかしうもおほゆることのすちに猶かくいひつたふるたくひや又もあらむとしころかけてもき、をよはさりけるとのたまへはこし、うと弁とはなちてまたしる人侍らしひとことにてもまたことひとにうちまねひ侍らすかくものはかなくかすならぬ身のほどに侍れとよるひるかの御かけにつきたてまつりて侍しかはをのつからもの、けしきをもみたてまつりそめしに御心よりあまりておほしける時きた、ふたりのなかになんたまさかの御せうそこのかよひも侍しかたはらいたければ

くはしくきこえさせすいまはのとちめになり給ていきゝかのたまいをくことの侍しをかゝる身にはをき所なくいふせくおもふ給へわたりつゝいかにしてかはきこしめしつたふへきとはかゝしからぬ念すのついでにも思ふたまへつるを仏は世におはしましけりとなんおもふたまへしりぬる御らむせさすへきものも侍りいまはなにかはやきもすて侍なむかくあさ夕のきえをしらぬ身のうちすて侍なはうちゝるやうもこそといとうしろめたくおもふたまふれとこの宮わたりにもときときほのめかせたまふをまちいてたてまつりてしはすこしたのもしかゝるおりもやとねんし侍へるちからいてまうてきてなむさらにこれはこの世のことにも侍らしとなくゝこまかにむまれたまひけるほどのこともよくおほえつゝきこゆむなしうなり給しさはきにはゝに侍し人はやかてやまひつきてほともへすかくれ侍にしかはいとゝおもふたまへしつみふち衣たちかさねかなしきことをおもひたまへし程にとしころよからぬ人の心をつけたりけるか人をはかりこちてにしのうみのはてまてとりもてまかりにしかは京のことさへあとたえてその人もかしこにてうせ侍にし後とゝせあまりにてなんあらぬよの心ちしてまかりのほりたりしをこの宮はちゝかたにつけてわらはよりまいりかよふゆへ侍しかはいまはかう世にましらふへきさまにも侍らぬをれせい院の女御殿の御かたなとこそはむかしきゝなれたてまつりしわたりにてまいりよるへく侍しかとはしたなくおほえ侍てえさしいて侍らてみ山かくれのくち木になりにて侍なりこしゝうはいつかうせ侍にけんそのかみのわかさかりとみ侍し人はかすゝくなくなり侍にけるすゑのよにおほくの人にをくるゝいのちをかなしくおもひ給へてこそさすかにめくらひ侍れなときこゆるほとにれひのあけはてぬよしさらはこのむかし物かたりはつきすへくなんあらぬまた人きかぬ心やすき所にてきこえんしゝうといひし人はほのかにおほゆるはいつゝむつはかりなりし程にやにはかにむねをやみてうせにきとなむきくかゝるたひめむなくはつみおもき身にてすきぬへかりける事などのたまふさゝやかにおしまきあわせたるほとものかひくさきをふくろにぬひいたるとりいてたてまつるおまへにてうしなはせ給へわれなをいくへくもあらすなりになりとのたまはせてこの御ふみをととりあつめてたまはせたりしかはこしゝうにまたあひみ侍らむついでにさたかにつたへまいらせむとおもひたまへしをやかてわかれ侍にしもわたくしことにはあかすかなしうなんおもふ給ふるときこゆつれなくてこれはかくいたまいつかやうのふる人はとはすかたりにやあやしきことのためしにいひいつらむとくるしくおほせとかへすゝもちらさぬよしをちかひつるさもやとまたおもひみ

たれたまふ御かゆこはいひなとまいりたまふ昨日はいとまひなりしをけふはう  
ちの御物いみもあきぬらん院の女一の宮なやみ給ふ御とふらひにかならずまい  
るへければかた／＼いとまなく侍をまたこのころすくして山のもみち散らぬさ  
きにまいるへきよしきこえたまふかくしははたちよらせたまふひかりに山の  
かけもすこしものあきらむる心ちしてなんとよろこひきこえたまふかへり給  
ひてまつこのふくろをみ給へはからのふせむれうをぬひて上といふもしをうへ  
にかきたりほそきくみしてくちのかたをゆひたるにかの御名のふうつきたりあ  
くるもおそろしうおほえたまふ色／＼のかみにてたまさかにかよひける御ふみ  
の返こといつゝむつそあるさてはかの御てにてやまひはおもくかきりになり  
たるにまたほのかにもきこえむことかたくなりぬるをゆかしうおもふことはそ  
ひにたり御かたちもかはりておはしますらむかさま／＼かなしきことをみちの  
くにかみ五六枚につふ／＼とあやしきとりのあとのやうにかきて

めのまへにこの世をそむく君よりもよそにわかるゝ玉そかなしき又はしに  
めつらしくきゝ侍るふた葉のほともうしろめたうおもふたまふるかたはなけれ  
と

命あらはそれともみまし人しれぬ岩ねにとめし松のおいすゑかさしたる  
やうにいとみたりかはしうてこしゝうの君にとうへにはかきついたりしみとい  
ふむしのすみかになりてふるめきたるかひくさゝなからあとはきえすたゝいま  
かきたらんにもたかはぬことの葉とものこまゝとさたかなるをみ給ふにけに  
おちゝりたらましようしろめたうとおしき事ともなりかゝること世にまた  
あらむやと心ひとつにいとゝ物思はしさそひてうちへまいらむとおほしつるも  
いてたゝれす宮のおまへにまいり給へれはいとなに心もなくわかやかなるさま  
し給ひて経よみたまふをはちらひてもてかくし給へりなにかはしりにけりとも  
しられたてまつらむなとこゝろにこめてよろつにおもひゐたまへり